

女人講の闇を裂く 笹沢左盾

笹沢左保

木枯し紋次郎シリーズ

女人講の闇を裂く



女人講の闇を裂く

昭和四十六年十二月十六日第一刷

著者〓笹沢左保

発行者〓野間省一

発行所〓株式会社 講談社

東京都文京区音羽二―十二―二十一 郵便番号一一二
電話東京(〇三) 九四五―一一一 大代表 振替東京三九三〇

印刷所〓豊国印刷株式会社

製本所〓黒柳製本株式会社

定価〓五二〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

© 笹沢左保 一九七一年

目次

女人講の闇を裂く

五

一里塚に風を断つ

六

川留めの水は濁った

一五

大江戸の夜を走れ

二七

土煙に絵馬が舞う

三五

画 岩田 専太郎
装帧 山内 暲

女人講の闇を裂く

1

篠ノ井追分をすぎると、旅人の姿が途絶えた。それは正直すぎるくらいに、正確な現象であった。暮れ六ツになると、犀川の渡し舟が止まることになっている。それで旅人たちはその前に、宿場の旅籠屋に草鞋を脱ぐことにするのだった。上り旅は善光寺で、下り旅は篠ノ井追分で、それぞれこの日の道中を終えるのである。

しかし、例外もあった。先を急ぐ旅人たちである。暮れ六ツまで、まだ多少の間があるから、あるいは最後の渡しに乘れるかもしれない。そう期待して、犀川の渡し場まで足をのばす連中であつた。暮れ六ツと言つても、まだ明るかつた。西の空が燃えるように、赤く染まつていた。

天保八年七月初旬、昼間の暑さもようやく柔らいで、汗に湿った肌を夕暮れの風が撫でて行つた。あちこちで蛸が鳴いていた。信州の夏の夕暮れは、望郷の念に捉われるような美しさとももの哀しさを感じさせる。道に長くのびている渡世人の影と、紫色のシルエットになった山が不思議に調和したりするのだった。

その渡世人は犀川の渡し場で、前に行く子ども連れの女に追いついた。今日最後の渡しだが、岸を離れようとしていたところだった。渡し舟は、満員ではなかった。客は、三分の一もいなかった。女が慌てて、子どもをかかえながら川の中へ駆け込んだ。

「待って下さい！」

女が、船頭に声をかけた。船頭は舟を止めようとして、竿を逆方向に突き刺した。しかし、^と船頭のすぐ後ろにいる二人の男が、その竿を水中から抜き取った。二人の男は髭の中で赤い口を開き、ゲラゲラ笑っている。酔っているのだった。

「おい、女。泳いで来ねえな」

「着ているものを残らず脱がねえと、この流れを泳いで渡することはできねえぞ」

男たちは、口々に言った。船縁^{ふち}を叩いて、^は嘯し立てている。長脇差^{どす}を腰にしているから、渡世人には違いない。だが、本物ではなかった。いわゆる無頼の徒であった。それだけに、始末が悪い。酔っているし、逆らえば舟の中で暴れ出すかもしれない。

そのとき、女の背後にいた渡世人が、川の中へ足を踏み入れた。渡世人は渡し舟に近づくと、^と船縁に両手をかけて強く引つ張った。渡しは、岸のほうへ逆戻りした。二人の男の顔から、笑いがすっと消えた。同時に男たちは立ち上がって、舟の左右から川の中へ飛び降りた。

水は、膝の下までであった。二人の男は、長脇差を抜いていた。澄んだ犀川の水に、残光と長脇差が赤と銀色に映えた。渡世人は、動かなかった。やや色変わりした三度笠を、目深にか

ぶっている。長身であった。夏物には違いないが、その木綿の着物は半分黒ずんでいた。

汗と埃が、縞か模様かわからないようなシミを作っている。着物の裾を、背中の帯に通して高くはしょっていた。腿から剃き出しになった脚に、雑巾のような黒い脚絆をつけている。袖を肩までたくし上げた腕に長めの手甲をはめて、振分け荷物を右肩に引っ掛けていた。

長い道中を続けて来た旅鴉であることはすぐわかるが、それにしても顔に日焼けをしていなかった。むしろ病人のように、青白い顔色だった。暗い眼差しと虚無的な無表情さが、その渡世人の冷たい凄味になっていた。彫りの深い整った顔立ちは、笑うということを感じない感じだった。月代がのびている。

渡世人は、ゆっくりと顔を上げた。感情のこもらない目で、二人の男をぼんやり見やった。三十すぎの渡世人の左の頬に、古い刀傷の跡があった。小さな傷跡だし、その両端の引き摺れも醜いというほどのものではなかった。渡世人は長さ五寸、約十五センチの楊枝を口にくわえていた。

当時の楊枝は、そのくらいの長さでも決して珍しくなかったのである。しかし、渡世人がくわえているのは、手製の楊枝であった。竹を削ったもので、両端が鋭く尖がっていた。渡世人は、その楊枝を唇の左端に寄せた。同時に、腰を揺するようにした。錆朱色の鞆を鉄環と鉄鐙で固めた頑丈そうな拵えの長脇差が、渡世人の左の腰でやや浮き上がる形となった。

「わあっ！」

喚き声を発して、右側の男が長脇差を振り回した。左側の男もそれに倣って、水を蹴散らし

て来た。渡世人の表情は、まったく動かなかった。ただその目が、男たちを憐れむように翳っただけだった。いつそうしたのか、わからなかった。一瞬後に渡世人は左手に振分け荷物を持ち、右手に抜き放った長脇差を握っていた。

二人の男が揃って、飛び込んだように水煙を上げて川の中へ身体を投げ出した。浅瀬なので、動かなくなった二人の男は流されなかった。男たちは、死んでいなかった。血で水が赤くなることも、ないようだった。峰打ちであった。

渡世人は長脇差を鞘に戻すと、身軽く渡し舟に飛び乗った。背後で凝然となっていた子ども連れの女のほうを、振り返ろうとしなかった。女と子どもは、船頭と百姓らしい老人とで舟の中へ引っぱり込んだ。舟が川を渡り始めた。

乗客たちは、渡世人に好奇の目を向けた。しかし、その渡世人は知らん顔で、流れが急になった川面へ視線を投げていた。女が渡世人の横にすわって、膝の上に子どもを抱いた。女は二十六、七で、平凡だが色白だった。女っぽい感じで、寂しげな顔をしている。子どもは三つぐらいの女の子で、目が大きかった。母子ともに、道中支度であった。

「あのう……」

女が遠慮がちに、渡世人の横顔を見上げた。渡世人は、特別な反応を示さなかった。

「お蔭で、助かりました。何と、お礼を申したらよいやら……」

女は、頭を下げた。

「恩に着ることはございませんよ。手めえのために、やったことなんですからね」

渡世人が、口を開いた。抑揚のない低い声であった。

「でも、これで明日中に、二本木へ帰りつくことができます」

「そうですかい」

「できることなら、お名前をお聞かせ下さいまし」

「堅気のお人に教えるような名めえは、持ち合わせておりやせん」

「わたしは越後の国中頸城郡二本木で、小さな商人宿を営んでおります。筆と申します。これは、娘の加代かよでして……」

女は、膝の上の子どもを揺すり上げた。加代という女の子は大きな目を見開いて、不思議なものでも眺めるように渡世人の顔をじっと覗みめていた。渡世人はまったく、この母子に興味を持っていないようだった。

「この子はもう三つになるというのに、未だに口をきいたことがありません。生まれて間もなく父親が亡くなったので、そんなことのせいかもしれないと思っておりましたが、もうこの頃では口のきけない子だと諦めています」

筆と名乗った女は愚痴めいたことを言いながら、膝の上の子どもを見やった。筆という女の顔が一層、寂しげに沈んだ。子どもが生まれて間もなく、父親が死んだという。筆という女は、二年ほど前に亭主に死なれた後家であった。

「今度はまた妹の嫁ぎ先で不幸がございまして、下戸倉まで参ったその帰り道だったのです。この渡しに乗れなければ明日のうちに二本木へは帰りつけないと、もうハラハラしておりますし

た」

いまの出来事に興奮しているのか、筆という後家は問わず語りにそんなことまで打ち明けた。

「明日までに二本木へ帰りつくということに、ずいぶんとこだわっておいでですね」

渡世人は、軽く目を閉じていた。

「はい。明日の晩は、庚申待ちでございます。ご存じでしょうが、二本木では庚申待ちの行事をこの上もなく大切にしております。土地の者としては、庚申待ちに二本木を留守にすることは許されません」

筆が、真剣な面持ちになって言った。渡世人は、どうでもいいというような顔き方をした。

庚申待ちとは中国から伝来した一種の信仰的習俗で、平安朝時代の貴族、中世の武家社会で重く見られていたものが、やがて地方の庶民の間の行事となったのである。

特に江戸後期には全国的な風習となり、あらゆるところに庚申塚や庚申塔が見られるようになった。庚申は中国の十千十二支の暦によって算出され、庚申の年は六十年に一度、庚申の日は一年に六回めぐって来る。庚申塔などは六十年に一度の庚申の年に建立され、年に六回ある庚申の日に庚申待ちが行われるのであった。

庚申待ちの夜は、誰もが眠らないことになっていた。眠ってしまうと、腹の中の三匹の虫が害をなすという禁忌があるからだ。またこの日の結婚や、男女が肉体交渉を持つことは固く禁じられている。それで村人全員が一堂に会して、徹夜で食べたり喋ったりする庚申講が広

まったのだ。

筆の言うように、二本木というところの庚申待ちは有名であつた。二本木は北国街道ほつごくの宿場町だが、旅人で賑わうといった土地柄ではなかつた。すぐ北に新井という大きな宿場町があるし、二本木は半農の宿場であつた。タバコの生産地として、商人が集まる時期に活気づく程度である。

そういうこともあつて庚申の日は、二本木宿全体じふぐが開店休業の状態になる。特に二本木の場合は、庚申待ちの女人講が有名であつた。夜になると宿場の女はひとり残らず、この女人講に参加して庚申待ちをするのである。もちろん、男たちも別の場所で、庚申待ちをする。男女が別々に庚申待ちをすることで、二本木の庚申講は知られていたのだ。

旅人たちもそのことをよく承知していて、庚申の日は二本木を通りすぎ新井まで足をのばした。手前の関山に泊る者も多かつた。明日が、その庚申の日なのである。それで筆も明日までには、どうしても二本木に帰りつかなければならなかつたのだつた。

「あつしみてえな者には、庚申待ちなど縁ゆかりがありやせんよ」

渡世人は、船縁に両肘を突いた。渡しは、犀川の中程をすぎていた。川面に映っている夕焼けが、更に鮮烈な赤味を増していた。渡世人は、楊枝を寄せた唇の左端から息を吐き出した。楊枝が震動するとともに、鋭い音が鳴った。

それは冬の夕暮れに吹き抜ける木枯しの音に似て、冷たくもの哀しい音であつた。音は川面を流れて、短い余韻を残して消えた。筆の膝の上で、子どもが驚いたように肩を震わせた。そ

れから加代という子どもは、渡世人を見て目を丸くした。

「なるほど、噂に聞いた通りだ。木枯し紋次郎か……」

不意に、背後で男の声がそう言った。筆が恐る恐る振り返った。同じような渡世人がいた。三度笠をかぶり、長脇差を胸にかかえている。もう四十に近いという感じだった。ドス黒い顔色をして、険しい目にゾッとするような冷たさがあった。

木枯し紋次郎は、その渡世人のほうを見ようとしなかった。背中を向けたままであった。

2

北国街道は中山道なかのせんどうの追分宿から北へはずれて、小諸、上田、下戸倉、篠ノ井追分、善光寺、野尻、新井、高田を経て直江津に通じている。信濃と越後を貫いている脇街道である。脇街道ではあったが、北国街道には一里塚や松並木が設けられていた。

その沿道に大名の居城が多く、参覲交代さんてんこうたいに利用される街道だったからである。また佐渡の金が運ばれて、逆に佐渡へ送られる無宿人の唐丸籠からまるかごが通る道でもあった。越後の米、生糸などを運送する要路でもあったのだった。

善光寺参りの旅人も多い。そうしたことから北国街道は、かなり発展しつつあった。しかし、やはり街道筋に見られるのは、鄙ひんびた風景だった。人の数が少ないし、人家の屋根は傾斜が急で厚味のある藁葺わらぶききばかりであった。

木枯し紋次郎は珍しく、そうした沿道の景色に目を配りながら歩いた。目を配るといって

も、細かく観察しているわけではない。ただ、視線を向けるだけであつた。むしろ、紋次郎は何も見えていなかったと、言つたほうがいいかもしれない。

いつもの紋次郎なら脇目もふらずに、かなりの速力で歩き続ける。そうしないのは、善光寺より北の北国街道は初めての道だつたからである。それに、目的地というものがなかった。越後を抜けて会津街道を行つてみよう、そんな漠然としたアテしかないのであつた。

もともと行くアテがあつて、旅を重ねている紋次郎ではなかった。流れ者が一定の場所に落着くことは許されないし、いるところがなければ放浪を続けるほかはないのだ。それに、ひとりであるには旅をすることがいちばんだつた。

紋次郎にとっては、歩き続けることが生きていることであつた。いつかはどこかで殺されるか、野垂死ぬかするだろう。そのときに紋次郎の旅の終点であり、紋次郎の一生が終わるのだつた。それまでは、アテのない旅を重ねなければならなかつた。

しかし、これまではアテのない旅だから、氣の向くままにのんびり歩こうなどとは一度も考えたことがなかつた。何か常に追われるような氣持ちで、アテのない旅を急いだものだつた。ところが、この北国街道の道中に限つて、先を急ごうという氣になれないのであつた。

今朝も、善光寺の旅籠屋を立つたのは、明け六ツをかなりすぎてからであつた。小さな旅籠屋で雑魚寝同然の相宿をしたために、殆ど眠れなかつたということもある。だが、旅籠屋を明け六ツすぎに出立するというのは、余程の事情がない限りあり得ないことであつた。

いままでの紋次郎なら午前四時、七ツ立ちが普通だつた。遅くなつたとしても七ツ半、午前

五時には旅籠屋を出ている。それが、今朝は明け六ツを過ぎてから、身仕度にかかったのである。心のどこかに、急いでも仕方がないという気持があったのだ。

なぜこうも、怠惰になったのか。疲れているのかもしれないと、紋次郎は思った。肉体的に、疲れているのではない。心の疲労であった。同じような日々の繰り返し、いつ果てるとも知れない流れ旅、何の張り合いもない今日と明日、そうしたことが心を疲れさせたのかもしれない。

善光寺から二里半で、牟礼であつた。その牟礼の手前で、子どもを背負った女を見かけた。

筆であつた。昨夜は善光寺についたところで、この母子と別れたのだった。恐らく、善光寺を七ツ立ちしてきたのだろう。加代は母親の背中で、ぐっすり寝込んでいた。

「あら……」

追いついた紋次郎に気づいて、筆は狼狽したような笑顔を見せた。恥じらいながら寂しそうな笑顔を浮かべた筆の顔が、そのように見えたのだった。

「旅人さんは、どこまでおいでになるんですか」

追い越しそうになる紋次郎を引き留めるように、筆が声をかけて来た。

「これと言って、アテはねえんで……」

紋次郎は、振り向かずには答えた。

「今夜は丁度、二本木あたりですね」

「庚申待ちでは、仕方がねえでしょう。もっと先まで、足をのばすつもりでおりやす」